

BIOLOGY DATA

1967年7月

昭和42年No.1

第三号

鹿児島高等学校生物同好会

目 次

序文	黒木長太郎	2
第三号発行にあたって	編集子	2
春の霧島神宮→湯之野路	若松茂正	3
第一回採集会報告		
鳥帽子織採集会記	的場京子	4
昆虫類採集記録	岩元重喜	6
カフトニボ(褐色型と透明型)の採集記録	若松茂正	7
鳥帽子織の水質検査	菊池光代	9
第二回採集会報告		
吉野採集会記	大木将幹	10
昆虫類採集記録	中山圭一	11
第一回文化祭開催する	(S・W)	14
ユスリカの唾腺染色体実験観察	菊池光代	15
アリの生態	原田純一	17
蝶の唾液坂汁実験	若松茂正	19
校内樹木の名ふだつけを行なつて	大木将幹 稲植大	20
校内樹木目録	的場京子	20
テレビ「自然のアルバム」より	山口きみ 若松茂正	22
鹿児島市近郊産蝶類の 冬の活動状況と初見日の記録(第二報) 1966・1967	鹿高生物同好会編	23
カバマダラを1月に大島で採集	若松茂正	33
シルビアシミを鹿児島市紫原で採集	若松茂正	34
随筆	久保正一	34
生物同好会に入会して	今村有紀子	37
生物同好会会長として	稲村直大	38
近ごろ考えること 過去2年間の生物同好会活動をふりかえりて	若松茂正	38
滅びゆくホタル	宮原国男	42
1966, 1967年の生物同好会活動状況	(M・K)	43
1967年後半期の活動計画	(M・K)	44
生物同好会員名簿	(M・K)	44
編集後記	編集子	46

序 文

星 本 吉 太 郎

生物同好会の諸子は、主として生物の研究に同調する者の一団で、指導の先生の教導の下に各自自発的勉強をするのであって喜ばしいことと思います。従来生物の研究調査については、割合若い学徒が相当のよき成績をあげてゐる実例少なからず、従って本同好会の諸子にも大なる期待をかける次第であります。

第三号発行にあたって

中途で終ることは容易であるが、長続きさせることはむづかしい。太く短くでなく、細く長く続かせることである。

鹿兒島高等学校生物同好会機関誌「BIOLOGY DATA」の2号が、今をさる1965年10月に発行されて以来、機関誌発行が久しく中断していた。1966年は、機関誌を発行するところではなく、同好会活動をより上げるのに精一杯であった。

今年の5月、2年生に全権を渡した我々3年生の会員は、とうにかして我々の手であと1号は発行したいと考え、望んでいた。高校生時代の良き思い出とある機関誌を、多忙な時間をさいて編集した。

発行までに2ヶ月余を費やした第3号は、ここにようやく日の目を見ようとしている。

我々がどうこう言う前に、みなさま御一読してみてください。

(編集子)

春の霧島神宮→湯之野路

若松茂正

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも

(万葉 志貴皇子の懼の御歌)

この和歌は多くの人々に好み歌われ、私もまたこよなく愛す和歌のひとつである。

わたしは、霧島がこの歌にうたわれている時期とまったく同じ季節に霧島の山々もようやく春の息吹きを感じさせる季節に霧島路を訪れ春を満喫した。今回の目的は、スギタニルリシジミの発生確認と、キリシマミドリシジミの越冬卵採取であった。昨年は、スギタニルリのあたり年と云われた年であったが、今年3月25日霧島神宮→湯之野を訪れた日は、天候の關係もあってか2頭しか得られなかった。キリシマミドリシジミは、^{生命に採取したのみじゃあ、たが。}春の霧島路を振り返りながら、たどってみることにしよう。

久しくネットを手にしていない私は、日豊線にかかった時には遠出採集の心持ちで大変はしゃいでいた。空は晴れ上がり、絶好の採集日和。まず、神宮境内でまた羽化したての美しいキアゲハが楽しそうに吸水していた。そうしているうちにも兄が大変よめよめしくとんで来たシジミを見つけ採集した。なんとスギタニである。大変さいさきが良く、本日の収穫を約束されているかのごとく思われたのであるが……。土殿の真紅と印の花の白のコントラストは、筆絶につくしがたい程美しいものであった。

そうこうしているうちにも、歩調は早まり神宮→湯之野間のちょうど中間の位置に来ていた。このあたりには、スジグロシロ・モンシロルリ・アテハ・キタテハ・テングテヨウ・ルリシジミ等が見られ、明るく開けた路上を横切るようにとび出したシジミを再度私の兄が得た。2頭目のスギタニルリである。さっきのものより裏翅の黒点が小さい気がする。私にはきょうは、つきがないらしく、吸水しているスギタニルリらしきものと1頭見つけネットしたが、ルリの早であった。

ついでにいない時は、ついでにないらしくこの橋も適当にマシマシドサ
神宮より約2.5km地点のマサガシ体眼オウキキリシマミドリシジミ
の生卵をやっと1コ得た。兄の聞いているのは、途中救コ得ているが、

このあたりのクリスマスは多くないらしい。

湯之野の少し前で生まれて初めて春の代表種、コツバメを目撃した。生まれたてのヒヨコが、自分より何十倍と小さいアリを見て、キョツギョツという驚歎の声を上げるように、生まれて初めてコツバメを見た私は、恍惚としている間に彼女を見失ってしまった。

湯之野を過ぎて林田まで、神宮から10K近い距離を還曆に間近の母は、元気に歩き続けてくれた。

春の暗れた1日を親子3人で十分に楽しんだ。また、良い機会があったら親子共に採集へ行きたい……。子供と共に採集へ出かけることを、この上なく楽しみにしている母のためにも――。

第一回採集会報告

烏帽子嶽採集会記

的場京子

1967年5月3日(水)憲法記念日、私達は烏帽子嶽登山コースでの第1回採集会を新入生観迎も含めて開いた。

9時40分平川駅を出てすぐ、私達は女子と男子と別々になってしまった。先生が、「頂上に行けば会えるかも……。」と、言われたので私達は頂上めがけて歩きはじめた。登る途中の平地では何も採らずに登っていった。しばらく行くと、烏居の近くに~~流~~流があった。ここでのプランクトン採取と水質検査をするために、プランクトンネットで川底をさらった。そのような~~流~~流が3ヶ所(烏居の所・5合目・7合目)あり同じ方法で採取した。川の中にクリの木があってそれに白い寒天みたいなものがついているのを見つけた。始めはなんだかわからなかったが、翌日学校で久保先生にお聞きしたら、ホウキダケと教えて下さった。

このあたりの登山道は傾斜が急しく、大変登りにくかった。そこにある~~流~~流があった。それからあとは100mぐらい歩くごとに休んで頂上まで登って行ったので、登山と同じようであった。頂上に

着いて少し経たぬ時男子の人が登って来たのでホッとしました。一緒に頂上で食事として、1時半すぎに下山を始めた。頂上付近の木の間よりながめる綿江湾は湖のようであった。その色は空の青さのようにあくまでも青く、点々と雲のようなさざ波だけが白く浮かび上がりたとえようのないその美しさは、私の若い心に奥深く刻み込まれたのでした。

下山の途中3番目の溪流があった。アラナリアを採集するため捜していたら、エビ・カニ・ヤゴがいた。このエビは種類が違っているらしく背中に2本の線があったが、名前がわからなかった。私達は植物だったので苔類を採集した。今度は白い色の植物を採集し、採集した時は何かわからなかったが、翌日、植物図鑑で調べたら腐生植物のギンリョウソウとわかった。くだりの途中、ミカンの白い花で吸蜜する蝶類(ナガサキアゲハ・アオバセセリ・アオスジアゲハ)と村山、若松、今村さんがそれぞれ採集した。たいらな道に出た時、アラナリア捜しのため小川の方へ下っていった。小川の所でカワトンボを見つけたが、このトンボには透明型の2型があるそうだ。

それから平川駅まで歩きつ時の4分の気動車で、一路西鹿児島へ。西鹿児島駅裏口で解散し楽しかった1日を振り返るように家路についた。

なお、採集収獲物についての報告はそれぞれの担当者によって報告されていますので、別稿を参照して下さい。

参加者(11人) 宮原先生、若松茂正、菊池光代、楢村直大、大木将幹、岩元重喜、的場京子、山智磨子、山口きよみ、今村有紀子、山下敬子(外部参加)村

参考文献

牧野富太郎(1963)新日本植物図鑑 北隆館
鹿児島県理科教育協会(1964) 鹿児島の自然

昆虫班採集会収獲物

岩元重喜

採集地 鹿児島市平川町烏帽子麓登山コース

採集日 1967年5月3日、○

採集者 若松, 稲村, 岩元, 大木, 今村

・採集収獲物(千ヨウ類のみ)

(1) アゲハ千ヨウ科

ナミアゲハ〔1♂稲村〕〔1♀大木〕

アオスジアゲハ〔1頭:ミカンの花(白)を吸蜜していた,若松〕

クロアゲハ〔1♂♀若松〕〔1♂岩元〕

ナガサキアゲハ〔1♂:ミカンの花(白)を吸蜜していた,村山〕

モンキアゲハ〔1頭稲村〕〔2頭岩元〕

ジャコウアゲハ〔1♀若松〕〔1♀岩元〕

(2) シロ千ヨウ科

モンシロ千ヨウ〔1♀稲村〕〔1♀岩元〕〔2♀♀大木〕

キ千ヨウ〔1頭岩元〕〔1頭大木〕

(3) ジャノメ千ヨウ科

ヒメウラナミジャノメ〔1頭若松〕〔2頭稲村〕〔2頭大木〕

(4) タテハ千ヨウ科

コムスジ〔2頭稲村〕〔4頭岩元〕〔1頭大木〕〔2頭今村〕

イチモンジ千ヨウ〔1♂2♀♀若松〕

(5) シジミ千ヨウ科

サツマシジミ〔♂♂♂若松〕〔1♂稲村〕 いずれも吸水中を
採集した。

ヤマトシジミ〔2♂♂若松〕〔1♂♀稲村〕

ルリシジミ〔1♀稲村〕〔1♂大木〕

ツバメシジミ〔1♂♀若松〕〔1♀稲村〕

(6) セセリ千ヨウ科

アオバセセリ〔1頭若松〕〔1頭稲村〕 いずれもミカンの花
(白)を吸蜜していた。

※モンキアゲハの Pumping の記録

平川駅より200Mぐらいの地奥で、am9:40コンクリート壁に流れている水を吸水するモンキアゲハ2子早を観察した。

我々は、初めて見る光景にもおどろきながらしばらく観察したが、口吻より水を吸い、尾端より水滴を規則正しく排せつするのを確認できた。腹部は大きくふくらんでいるにもかかわらず、食欲に吸水することをやめようとはしなかった。

クロア牛ハも吸水の仲間入りをし、ジャコウアゲハも飛来し求水の様子をみせたが、吸水しなかった。

(昆虫班収獲物のうち、のこる甲虫類その他は、未同定のため今回は報告できなかったが、次号に掲載する予定である。)

カワトンボ(褐色型と透明型)の採集記録②

若松茂正

今回の採集会目的のひとつとして、2回目を迎えたカワトンボの発生・分布の年較差を調査するのが含まれていた。当地は溪流が多く、生きた化石としてあまりに著名なムカシトンボも生息している所(薩摩半島南限記録地)がある。本誌2号にオ1報があるのを趣味的に記録を発表していき、ある程度結論の出せる段階にきた時詳しいことは報告することにして今回は一応考察を含めて報告する程度にとどめるよせる近代化の波には勝てず、よく残っていた頂上の手前(8~9合目)付近の森林は伐採されてあり、我々をガッカリさせた。

・採集地と採集日

鹿児島市平川町烏帽子嶽登山コース

1967年5月3日(水)鬼法記念日、○

・調査方法

オ1報の時と同じ方法でおこなった。烏帽子嶽付近の略図と記号の使用方は紙面の都合で省略したので、オ2号を参照しながら併せてご覧いただきたい。なお今回は、D地域(8~9合目)付近を便宜上付

け加えた。

表1より考察して表2のような結果が出てきた。

表1 1967年のカワトンボ(両型)流域別調査表

流域	褐色型	透明型
A(下流)	0	1名他数頭型
B(中流)	0	0
C(上流)	数頭他普通	数頭他普通
D(河合)	0	3頭目撃

表2 1965年と1967年の年較差表

		1965	1967
A(下流)	褐色型	0	0
	透明型	1名	1名他数頭
B(中流)	褐色型	0	0
	透明型	0	0
C(上流)	褐色型	6名	数頭
	透明型	5名56名	数頭
D(河合)	褐色型	/	0
	透明型		3頭

○考察

时期的に考えると今年は20日早く、まだ発生初期段階だったのでこれらの差が出て来たように思われる。これだけの資料で考察することは大変危険なことのようにあるが、左記の表より判断すれば

①カワトンボ(主に透明型)が上流より下流へわがずがずつながら、移動?していると考えられる。

②本誌やワゴの1965年カワトンボ(両型)流域別表と表2より鳥帽子傘でのカワトンボ発生期が予想できる。すなわち早いものは4月中旬ごろより発生し(初見記録)、4月中旬中ば(25日前後)にはもうボク——見られ、最盛期は早い年で5月上旬終りより中旬を経て下旬中ばごろまでで、遅いものは6月初旬にも見られるであろう。

従って今後の課題は

ア) B地域を主にしなおA・C地域の徹底調査をおこない発生0を確認することであろう。なぜ中流には生育しないか?

イ) 本誌で採集されている含3型と早1型は、何かある遺伝因子によるのか、あるいは生育環境にもよっているのか。A B C Dの地域の徹底調査により、その場所の標本を確保して含褐色型はどのような所に生育し、含透明型はどのような所に生育するのかを調査することによって何らかの解明の糸ぐちが見つかるかも知れない。大変おもしろく興味深い課題である。

ウ) カワトンボとミヤマカワトンボの混生の問題とミヤマの発生期。1965年の時は、カワとミヤマカワの混生が著しく乱飛しているのは興味をおぼえさせられた。今回の場合ミヤマカワは1頭も見られな

か、下ので発生期調査はおもしろいだろう。

ア、イ、ウ、より考える時に、1966年の記録が問題に存てくるようである。

引用文献

- 1) 若松茂正(1965) カワトンボ褐色型と透明型の採集記録, B I O L O G Y DATA 第2号: 4
- 2) 鹿児島県理科教育協会(1964) 鹿児島島の自然

烏帽子嶽の水質検査

菊池光代

- 採取日 1967年5月3日, ○
- 採集場所 鹿児島市平川町烏帽子嶽溪流
- 使用試薬 ~~硝酸銀溶液 (AgNO_3) 塩分があると白濁する。~~
 - a) 硝酸銀溶液 (AgNO_3) 塩分があると白濁する。
 - b) ネスラー試薬 アンモニアを含んでいると黄褐色になる。
 - c) 過マンガン酸カリ液 (水10cc, 希硫酸を約2cc, 過マンガン酸カリ液1滴を加えて熱したもの) 有機物があれば, 過マンガン酸カリの紫色が消える。
 - d) G・R亜硫酸試薬 有機物があれば, 赤色になる。

検査結果

(こゝでは反応を示したものを⊕, 反応を示さなかったものを⊖で略す。)

(1) 3合目 (神社の下の流れ)

硝酸銀溶液 ⊕ (ごく薄い白い沈殿)

ネスラー試薬 ⊖

過マンガン酸カリ液 ⊕ (割合に濃い紫色)

G・R亜硫酸試薬 ⊖ (もっとも濃い赤色)

(2) 5合目

硝酸銀溶液 ⊕ (3合目のものより少し濃い)

ネスラー試薬 ⊕ (割合に濃い黄褐色)

過マンガン酸カリ液 ⊕ (3合目のものより薄い)

G・R亜硫酸試薬 ⊕ (3合目のものより薄い)

(3) 7合目

硝酸銀溶液 ⊕ (もっとも濃い白色)

ネスラー試薬 ⊕ (もっとも濃い黄褐色)

過マンガン酸カリ液 ⊕ (ごく薄い紫色)

G・R亜硫酸試薬 ⊖ (ごく薄い紫色)

考察

・採集をしたのが5月3日、水質検査をおこなったのは、それからしばらくした後だったので、この結果からはっきりしたことは言えな
いかもしれないが、

①アンモニアの含有を示すネスラー試薬の黄褐色や塩分の含有を示す白色は、上に登れば登るほど濃くなった。

②有機物の有無を示す過マンガン酸カリ液の紫色は、アンモニア、塩分に反比例して、登るにつれて薄くなることがわかった。

③同じ各場所で、プランクトンネットを使用して採取した水を検鏡したが、残念なことにゴミらしき物のほか、何も見ることはできなかった。

皆さんの中にも、山に登る人が多勢いることと思う。湧水はまあまあとしても、とんなにきれいに見える谷川の水や川の水でも、飲むことは“禁物”である。その中には、多くの目に見えない有機物や、アンモニアが含まれているかもしれない。

この検査を行なうにあたって、化学の板沢・太田両先生の御協力をいただきました。文末ながら、二先生の御厚意に対して心より御礼申し上げます。

吉野採集会記

大木將幹

1967年6月4日(日), ①

7時20分、予定通りの顔ぶれがそろったが、まだ稲村君は来ていなかった。我々9人を乗せた汽車は7時36分西駅を出発し、途中鹿駅で乗り換え、初夏早朝の冷たい海風を受けながらも速力を早め8時02分、才1目的~~意~~ヶ水に到着した。

当地は初めての所だった。また、地図もなく心細かったが、土地の人に聞いたリして上之原へ登って行った。途中男子と女子とに分かれてしまったが、中腹の水道の所で~~休~~んだりして登った。

8時30分、意ヶ水にやっと出た。予定は海岸側を通って行くことになっていたが、ゴルフ場の西側の道路に行くことにした。しばらくして稲村君、そして若松さんも来られて一同ホッとした。一諸になつてからは、ずっと平坦な道路が続く。昆虫を採りながらも楽しく歩き続けた。この附近一帯は、2種程のチョウばかりしかなく、甲虫類の方が多く採れたようだった。我々の計画不足のため、道路を間違えたりして、まったく別の方向に行ってしまった。そこでゴルフ場から中別府の方へ行くことにした。道路が幅広く大きかったので脇道にそれたり、野原へ行ったりして昆虫を採った。またこの道では車が通るたびに、砂ぼこりをあびた。

10時30分に中別府に着き、一休みした後11時に出発した。中別府からは海岸に向かって進んで行った。進みながらも昼食をとる場所を捜したりしたが、適当な場所が見当らずそのまま歩いていった。歩き続けていたせいか疲れて、除々に遅くなっていった。この辺一帯は木が生い茂っていたため、チョウ類が多く採れた。やがて道路が下り坂になってこのまま行けば、海岸に出してしまうということで手頃な場所を見つけ、待望の昼食をとることになった。そこで冗談など言ったりして、30分の昼食は楽しくすごした。この附近から海岸までは階段が続く。皆よく昆虫などを採っていたようだが、15分程して我々は三船に降りた。海がすぐ近くにあり、とても涼しかった。1

休みして磯まで歩いた。30分程歩いたら、磯に着いたが、苔それぞ水日に焼けていた。1時25分発のバスに乗車したが疲れた様子で肩を寄せあつうようにうなづきをたれていた。

○参加者(11名)

宮原國男教諭、若松茂正、稲村直大、大木將幹、的場京子、松尾真中山圭一、竹田明、山口きよみ、今村有紀子、今村まこと(外部参加)

昆虫班 寺山採集記録

中山圭一

1967年6月4日(日)午前7時家を出発し、西駅に集合した。竜ヶ水で汽車を降りると、急な坂道を登ることとなった。名瀬出身の僕は、初めての土地で向もかも珍しかった。しかし、急な階段が頂上まで続いていたので、大変疲れた。僕の採集したかったのは、ミカドアゲハ・キマダラヒカゲ・サツマジミなどである。ヤブや木のくげみなどの下を通りながら、階段を登って行ったのだが、何の収穫もなくただ一頭、アオバヤヤリを見ただけであった。頂上についたら、大島で見られなかった蝶が、僕を歓迎してくれるのではないかと期待していたが、なんのこともなかった。飛んで来たのは、モンシロチヨウばかりだった。しばらく行くと、若松さんと稲村さんが、「時間を間違った。」と言って、やって来た。そうして歩いているうちに、色々の蝶が飛んで来き。モンシロ・スジグロチヨウ・ヒメアカタテハ・ヤマトンジミ・ツバメシジミ・ルリシジミ・モンキチヨウ・アゲハチヨウ・キチヨウ・コミスジ・アカタテハ・アオスジアゲハ・キタテハなどを採集した。やがて楽しい昼食を終え、広葉樹の林にきて、そこでは、サツマジミ・ムラサキシジミ・ナガサキアゲハ・ワロアゲハ・モンキアゲハ・アゲハチヨウなどを採集。この時、目的の一つであったサツマジミを採集した。これで朝早くから汽車にのり、ここで班の採集した蝶を種類別に分けると次の通りである。記録の表わし方は、(採集地・採集数・採集者)の順であり、採集者(採)は、若松、S W, 稲村 N I, 大木 M O, 中山 K N, 竹田 A T, 松尾 T

してある。

(1) アゲハチ ヨウ科

- アゲハチヨウ (ゴルフ場, 1♂MM採, 中別府, 1♂MO採)
- アオスジアゲハ (中別府, 2♂NI採, 三船1♂KN採)
- クロアゲハ (ゴルフ場SW採, 三船♀KN採, 三船♀MM採)
- ナガサキアゲハ (中別府♂NI, AT,)
- モンキアゲハ (中別府♂KN, SW採, 三船♂MM採)

(2) シロチヨウ科

- モンキチヨウ (中別府♂NI, AT, KN, MM採ゴルフ場♂SW, MO, KN, NI)
- キチヨウ (ゴルフ場前SW, MO, KNいずれも♂)
- モンシロチヨウ (ゴルフ場前SW, AT, MM♀⁵頭♂⁵頭)
- スジグロチヨウ (ゴルフ場前SW, KN, AT, MM, MO, ♀六頭♀三頭)

(3) タテハチヨウ科

- イチモンジチヨウ (中別府♂KN採)
- コムスジ (ゴルフ場♀SW, KN, AT採)
- アカタテハ (ゴルフ場♀SW, NI)
- ヒメアカタテハ (ゴルフ場SW, MM, MO)
- キタテハ (

(4) シジミチヨウ科

- ヤマトシジミ (ゴルフ場♀SW, NI, AT)
- ツバメシジミ (ゴルフ場♀KN, MM)
- ルリシジミ (中別府♀SW採1頭)
- サツマシジミ (中別府♂KN1頭)
- ムラサキシジミ (三船♀MO, MM, SW採)

(4科19種)

第一回文化祭開催のころ

本校初の試みとして第一回文化祭が、菊の香もがくわしく深まった秋の11月1・2日開催された。これは生徒の間で、生徒自身の手により文化祭を開催しようという、気運のもり上っていた表わ水であった。わか生物同好会も下記のような内容を出品した。

世はまさに即席時代、開催前日にあわてての間にあわせだったが、幸い大好評で会費を喜ばせた。2年目を迎えた生物同好会の存在を知ってもらい、どのような活動をしているのを見てもらっただけでも意義があったと鬼つ。

説明には若松と原田があたり、2000名近くの見客の説明に應じるのは大変であった。若松など声がかうーになってしまい苦労した。しかし、「美しいわねえ!」「すてき!」等々の黄色い驚異・感嘆の声があちこちで聞かれ、また本州採集旅行の説明では「一面色とりどりの高山植物が咲き乱れ、花よりもっと美しい高山の姫君を……」と説明するに「ロマンチックね……」と変わってくる。もう申し分なし、だから千ヨウ採りが止められない——。

今回は理科部(生物・物理・化学)が合同で、マイナスの面も出て来たので次回からは、元々元々の専攻教室で行ないたい。元々と次回は計画的に広い視野から出品し質的向上を期待したい。

・第一回文化祭出品物

(1) 昆虫類標本

・蝶類 204種 1822隻

(産卵産9科96種、具外産6科73種で1782隻;外国産6科35種で40隻)

・蜘蛛類 132隻

・甲虫^(ツチムシ) 500隻

・トンボ 120隻

・衛生昆虫とセミ 100隻

昆虫統計 2634隻
[仁0-38箱, 蜘蛛類 計40箱]

(2) カエルの心臓鼓動実験

(3) 本州採集旅行報告

(絵リガキ、カラ写真、民芸品、浮舟シテル、長野浅間・樽井田と福島白河の全図など)

(S・W記)

ユスリカの唾腺染色体実馬鏡観察

菊池光代

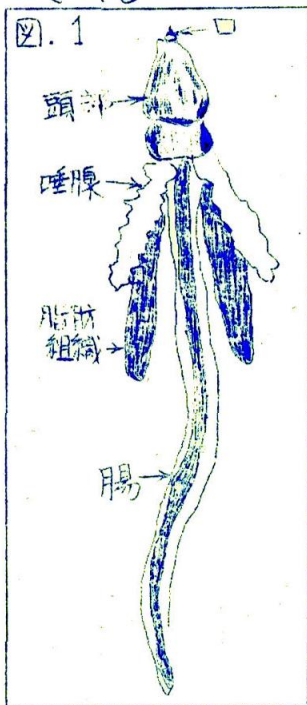
- ・採集地 鹿児島市伊敷町付近の小川
- ・採集日 1967年6月
- ・材料 ユスリカの幼虫
- ・器材 顕微鏡・スライドガラス・カバーガラス・メス・針・ピンセット・酢酸カーミン液

◎実験観察過程

(1) 水できれいに洗ったユスリカの幼虫の水をきり、スライドガラスの上のせる。

体の後部をピンセットで押え、一方の手に縫針を持ち、これで静かに頭を引っぱると、首が切れ、頭について消化管やその他の器官とともに、1対のドロリとしたがんじのする袋状のものが見られる。(図1参照)

また、幼虫の体の第2関節のところを、メスで切断し、体を押えながら針で後方から頭へとしごく、断面から唾腺はみ出しってくる。

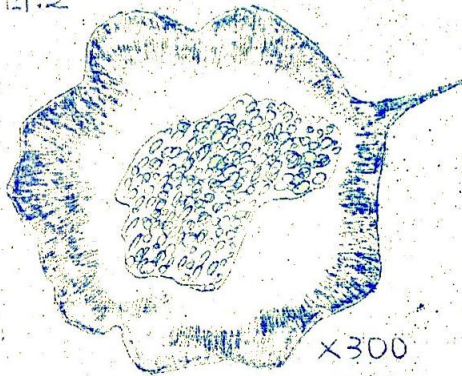


(2) 唾腺が見つかったら、腸・頭など不要なものを取り除き、酢酸カーミン液を滴下し、2~3分おく。2~3部経ったら、この上にカバーガラスをかけ、初めは、100~300倍の低倍率で検鏡する。(図2参照)

(3) 検鏡できたら、静かにカバーガラスをおさえる。こゆによって細胞が広がる。600倍で検鏡すると、細胞が1つ1つ離れて、内部の核中に、横じまを存した帯状の染色体が見られる。

実験に用いたオオユスリカの幼虫は、普通赤状ウフラと呼ばれ、北半島の河川を主に

図.2



広く分布し、年中池や溝などにトンネルを作って潜んでいる。体は12関節からなり、環形動物のミミズの如く思い出させるが、検査した幼虫は、美しい瑞端としたサクラフンボのようだ。

この実験においてまず苦労したのは、(1)の幼虫の唾腺出してあった。1対の唾腺を満足な状態で……と、思い次々と、何十匹という幼虫を、オ2関節の

所で切断する手法や、引っぱる手法をやってみたものの、満足に1対えろって取り出せたのは、その中のわずか2匹だった。

何か他に、唾腺を取り出すための良いテクニックみたいなものがあるのだろうか。

(1)の確率がとても低かった関係で、図.2も正確にスケッチできず、(3)の段階にして、とうとう私の実験は、行き詰ってしました。染色体を観察できると思って顕微鏡をのぞいたが、どこにもえれらしきものは発見できない。見ることのできたのは、取り除くのを忘れられ、無惨に破れた襦袢ばかりであった。自分では静かに押えたつもりが、以外と必要以上に押えていたのかもしれない。それ以外には、観察できた唾腺が、どこにも消えるはずはないのだから……。

なお、この実験をやっている間に気づいたことであるが、幼虫は水気があると動いて、引き抜くにもやりにくいから、初め水取紙や、ガーゼの上に乗せて、水気を取ると、動きがなくなりやりやすくなる。

わたしのやった範囲では、全然赤ボウフラの姿が見られず、まったく手も足も出ない状態であった。

しかし、幸いにも先輩の佐藤さんの御協力を得てここまでやることができました。佐藤さんの御厚意には、深く感謝致します。

今回の実験は一応終えるが、今後いつやることができるかわからぬわたしにとって、このまま中途半端な状態で残すことは、残念ではあ

アリの生態

原田純一

。観察動機

私がアリの生態というものに興味をもったのは、ふとしたこと
からであった。それは6月の下旬ごろだった。私が帰宅の途中ふ
と下を見ると、一匹のアリが一生懸命に昆虫の死骸を運んでいた。
私はこのアリには悪いようだがこのアリを捕えて学校へ持っ
て来て早速昆虫図鑑を調べてみた。そうすると以前私が知らな
かたことが次々にわかり、それ以来私はアリに興味をもちアリと
いうものについて、もっと多く知ろうと思い、そしてアリの生態
を観察するに絞ったのである。

。種類

アリの種類は30種類以上あり、そのうち日本各地に営巣するア
リは、33~34種類でアリの種類の大部分を占めている。鹿児
島で見つけることのできたアリは、クロオオアリ・オオズアカ
アリ・オオハリアリ・ミズシクアリ・ヒメアリその他数多くが
以上の5種類をとりあげ、特にそのうちの2種類について後にの
べてみよう。

。生活環境

また上の5種類のアリのうちの、一般に乾燥したところの営巣し
て生活するものと、湿ったようなところの団塊に営巣して生活す
るものとに区別することができる。前者は、クロオオアリ・オ
オズアカアリとなあり、後者はオオハリアリ・ミズシクアリ・カ
ドフシアリなどの他多くのアリがこれに該当する。

[クロオオアリ] *Camponotus Japonicus* Moyle

鹿児島市草牟田町護国神社境内 1967年6月11日(日)

[分布]

このアリは日本各地に分布し、ごく一般に採ることができる。またこのアリは乾燥地域に営巣して生活している。

〔体長〕

日本にいるアリの種類のうちでは最も大きく7~13mm程度である。

〔体〕

一般に黒色をおびており、他のアリと比較してみると、このアリは他のアリより光沢が少ないようである。また、このアリは体中が剛毛におおわれており、特に腹部と足の部分に多量である。

〔活動状況〕

朝 日の出と同時に活動を始めて、9~11時ごろになると動きが活発になってきてアリの数が最も多くなる。

午 太陽がかんかん照りつけるような時間になると日当りで活動が少なくなり日陰での活動が多くなる。

方 日の入るころになるとアリの数がだんだんと少なくなり、そして日が入ってしまったらアリはどこにもみあたらなくなった。

〔なわばり〕

またこのアリの場合は、勢力範囲というのが決まっておられこれを“なわばり”と呼ぶ。私は観察中にこのアリ同士が戦っているところを何回も見ることができた。このアリ達は、まさに生きるか死ぬかの戦いであった。私は、またアリの死骸をも見ることができた。これは“なわばり”争いのためであろうと思われた。

〔獲物〕

アリの食物は多様である。普通どのアリの場合でも同じである。

◦昆虫の死骸

◦植物の蜜

◦アリ 同種あるいは異種

〔オオズアカアリ〕 *Pheidole nodus* Smith

◦採集地及び採集年月日

鹿児島市草牟田町 護国神社境内

1967年 6月25日 (日)

〔分布〕

このアリは日本各地に分布せず、本州の南岸から四国、九州に多量に分布する。また、このアリも乾燥地域を好んで、石の下などによ

く習業して生活を営んでいる。

〔体長〕

ごく普通のアリと変わりはないが、クロオオアリよりずっと小さく、体長は3〜5mm程度である。

〔体〕

体は赤褐色をおびており、特に頭部と腹部が濃いようであった。

〔活動状況〕

朝、昼、夕方と区別するのが困難で、朝でも昼でも夕方でもよく活動するアリである。また、どのアリでも同じであるがもしあれば、このアリは、あまりにも食物を見るということを知った。というのは、私の部屋に砂糖を置いていたら、どういふわけか、5分ぐらい過ぎてから砂糖にいっぱいアリが群らがっているのを見つけた。私がアリについてひとつわがらない点がある。それは、アリという生き物は食物を捜すのが早い。それは食物の臭いによって捜すのか、触角によって捜し当てるのか、それはまだ未定である。

〔獲物〕

獲物は、前のクロオオアリの場合と同じである。

蝶の唾液吸汁実馬食

若松茂正

蝶	汁	実	馬	食	幼	若	松	茂	正																		
種	二	上	用	と	石	前	だ	け	一	人	前	に	件	け	て	し	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所	る	ま	っ	た	い	な	ほ	若	松	茂	正	幼
ハ	以	上	い	さ	ま	も	だ	い	思	っ	た	の	か	の	所												

校内樹木の名ふだ付けを行なって

稲村直夫・大木将幹

今学期の計画の中のひとつとして、校内の樹木全部に名ふだを付けることになった。5月中旬頃の例会で、「校内樹木名ふだ付け」の計画が決定してから後、下記の様な要領で仕事がすすめられた。

最初に樹木の枝を切って来て、それからそこからひとつひとつの図鑑で調べたが、日夜お目にする植物でもいざ和名を調べるとなると、そうたやすくはなく、ながへの作業であらう。折りが家庭訪問の時期にあたり、割合まとまと時間こそ、名前調べに当てることができたことは、幸いだった。

- 図鑑を使用しての名前調べ。 5月27日 → 6月2日
- 地域学部林学課の迫・初島先生による御同定。 6月3日
- 名ふだを付ける(ペキぬり、名前書き、取りつけ)ことのわりあて。 6月6日
- 仮の名ふだ(名前を一時期示すため)を取りつけた。 6月7日

文末から植物の同定を心宜くしていただいた、迫・初島両先生の御厚意に対して、全員一同に御礼申し上げる。

校内樹木目録

Gymnospermae	裸子植物	
Cycadaceae	ソテツ科	
<i>Cycas revoluta</i> Thunb.		ソテツ
Ginkgoaceae	イチヨウ科	
<i>Ginkgo biloba</i> L.		イチヨウ
Podocarpaceae	マキ科	
<i>Podocarpus macrophylla</i> D. Don		イヌマキ
<i>Podocarpus Nagi</i> Zoll et Moritzi		ナギ
Pinaceae	マツ科	
<i> Cedrus Deodara</i> Loud		ヒマラヤスギ
Taxodiaceae	スギ科	
<i>Cunninghamia lanceolata</i> Hook.		コヨウザン
<i>Hetasequoia glyptostroboides</i> Hu. et chen		アケボノスギ
Cupressaceae	ヒノキ科	
<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl var. <i>brertramii</i> Mast		ヒノキ
<i>Juniperus chinensis</i> L.		イブキ

的場京子



Angiospermae	被子植物	
Dicotyledoneae	双子葉植物	
	古生代被区	
Casuarinaceae	モクマオウ科	
Casuarina equisetifolia Torster		トキワギヨリユウ
Salicaceae	ヤナギ科	
Salix babylonica L.		シダレヤナギ
Betulaceae	カバノキ科	
Alnus japonica Steud.		ハンノキ
Fagaceae	ブナ科	
Quercus dentata Thunb.		カシワ
Shija Sieboldii Makino		イタジイ
Quercus variabilis Blume		アベマキ
Quercus glauca Thunb.		アラカシ
Lithocarpus edulis Nakai		マテバシイ
Ulmaceae	ニレ科	
Celtis sinensis Pers. var japonica Nakai		エノキ
Lauraceae	クスノキ科	
Cinnamomum Camphora Sieb.		クスノキ
Saxifragaceae	ユキノシタ科	
Hydrangea macrophylla Serotina var Otaksa Makino		
Hamamelidaceae	マンサク科	
Distylium recinosum Sieb et Zucc.		イスノキ
Rosaceae	バラ科	
Prunus Mume Sieb, et Zucc.		ウメ
Leguminosae	マメ科	
Cercis chinensis Bunge		ハナズオウ
Robinia pseudo-Acacia L.		ハリエンジュ
Meliaceae	セシダン科	
Toona sinensis Roem.		チヤンチン
Aquifoliaceae	モチノキ科	
Ilex rotunda Thunb.		フロガネモチ
Celastraceae	ニシキギ科	
Euonymus japonica Thunb.		マサキ
Aceraceae	カエデ科	
Acer palmatum Thunb.		タカオモミジ

Malvaceae	アオイ科	
Hibiscus mutabilis L.		フヨウ
Sterculiaceae	アオギリ科	
Firmiana Platanifolia Schott. et Endl.		アオギリ
Araliaceae	ウゴキ科	
Fraxinus japonica Decne. et Planch		ヤツテ
	後生花被区	
Fricaceae	ツツジ科	
Phododendron indicum Sweet		サツキツツジ
Oleaceae	モクセイ科	
Ligustrum japonicum Thunb.		ネズミモチ
Ligustrum obtusifolium Sieb. et Zucc		イボタノキ
Osmanthus fragrans Lour		ウスギモクセイ
Osmanthus asiaticus Nakai		モクセイ
Osmanthus ilicifolius Mouillefert		ヒイラギ

テレビ「自然のアルバム」より

山口きよみ・若松茂正

1967年3月21日 am 11:20-11:50 NHK-TV(カラー)

高山の蝶

本州(北アルプス)に産する高山蝶10種類の生態を調査すべく、雪とけより5ヶ月の向高山に通い続け、10種の高山蝶の各世代をカメラに納めNHKならさではのたがかりな生態観察で見せるを魅了し、また初學者にもおもしろく興味深い放送だった。

筆者のひとり若松は、このうちの何種かを昨年の夏実際にこの目で見、お花畑の中で夢幻の境にひたり高山の姫君庵とたゆむた思ひ出が、さざへ浮かぶブラウン管に食い入る跡に見入ったものがあった。

高山蝶は、北海道では平地にもいるが、気候の暖かな本州では山奥にだけとり残された種属なのである。彼等らのうちの何種かは冬を越してから4月中旬の倉草トコとうみ、次代の新しい蝶が生まれてくるころは、北アルプスも夏になっている。日の出がらう時間くらいに、高山植物のついでにつけも消えようとするころ、小天使のようなクモマツマキを始めとした高山蝶は活動を始めるのである。

上記の分け方は、學者によって色々な分け方があるが、高山蝶はウスバキチョウだけという考えもあるそうであるが、まだハッキリしたことはわからない。

高山蝶

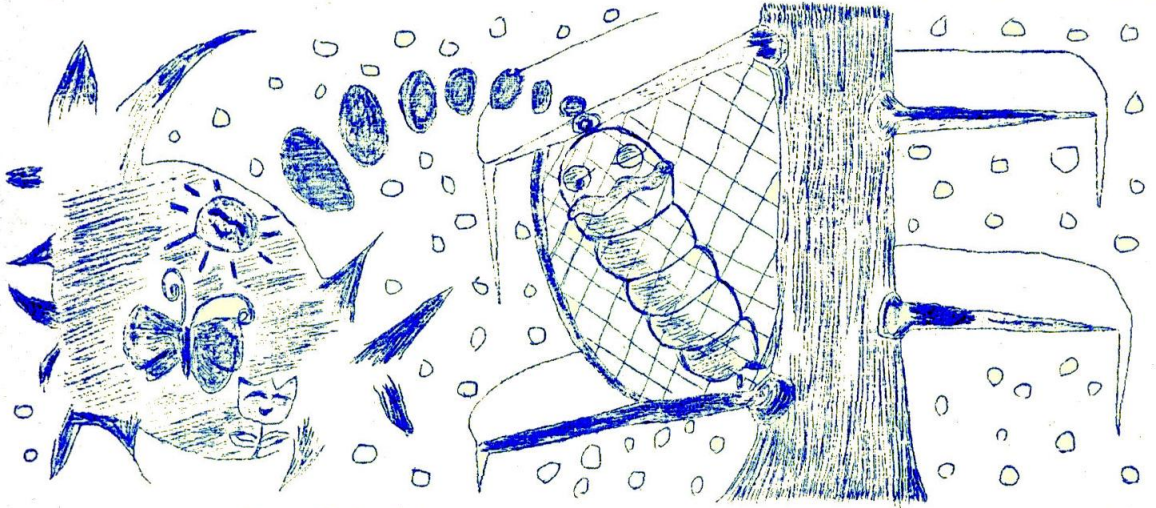
- ・本州(10種)
 - タカネキマダラセセリ
 - ミヤマシロキョウ
 - シモマツマキチョウ
 - ミヤマモキチョウ
 - オオイトモジ
 - コヒオドシ
 - ベニヒカゲ
 - クモマベヒカゲ
 - タカネヒカゲ
 - ヤリガタケシ
- ・北海道(6種)
 - ウスバキチョウ
 - アサヒヒョウモン
 - クモマベヒカゲ
 - ダイセツタカネヒカゲ
 - カラフトヒリシジミ
 - カラフトタカネキマダラセセリ

鹿児島市近郊産蝶類の

冬の活動状況と初見日の記録(第一報)

1966, 1967

鹿児島高等学校生物同好会編



I はじめに

創刊号で1965年の春の千ヨウの記録を発表して以来、春の千ヨウの記録を発表する機会に恵まれなかったが、今回は1965年12月から1966年春までと、1966年12月から1967年春までの記録を一步進めて、冬の蝶の活動状況と初見日を中心とした報告にする。これはただ漠然と春の千ヨウの記録を報告するより、これらの記録も生かし且つ冬の千ヨウの活動状況を加えると、色々方面白い問題がここに生じるので、これらの問題を解くカギ、記録の積み重ね、の意味を第二報として報告する次第である。

これらの問題を解くカギは、×モを持って書くことに始まり、×モを持って書くことに終るのである。

“採った” “見た” として “書こう” 記録の積み重ね

II 凡 例

- 1) 記録の表わし方は、採集あるいは目撃日・採集あるいは目撃地名・採集あるいは目撃キョウ名・採集あるいは目撃数の順であり、目撃記録の個体数は、井(多数), 卍(普通), + (小數) でそれぞれ略してある。なお、採集あるいは目撃者は、特記しないうがざり若松炭正である。
- 2) 若干の生態観察記録は、採集あるいは目撃記録の後に付記した。

III 採集あるいは目撃記録

1965年12月→1966年春

XII. 5 鹿児島市田上町唐湊

ムラサキツバメ 越冬集団は先週に比べて、はるかに少なくなると見ただけで、最高8頭だった。

なお、フェニックス葉上に倒れているムラサキツバメ1羽を採集した。

歩いていてふれたのが、地面に5頭倒れるようにとぶのを見た。

XII. 11 鹿児島市葉師町

キタテハ 1頭目撃

XII. 23 鹿児島市上荒田町

キキョウ 1頭目撃

アカタテハ 1頭採集：飛来しツバキの花(赤)の蜜を吸い、次にほしてあった洗たく物(まだ少しぬれていた)の水分を感じ口吻を出しかけたが、ヒビ去った。

砂糖水を飼育→I. 20死(生存期間, 28日)

鹿児島市武岡

キキョウ 1頭目撃：和名不明の1植物で吸蜜していた

アカタテハ 1頭目撃(中破)：地上で日光よくをし、近づくるとヒビ去りまた、同じ所に下りて日光よくをしていた。(テリトリー?)

XII. 27 鹿児島市上荒田町

ムラサキシジミ 3頭目撃：1頭はフェニックスを越冬していたのか、フェニックスの根もとから歩いて来て葉上を翅を130°ほどひろげ日光よくをしていた。

XII. 29 鹿児島市上荒田町

ムラサキシジミ イスノキを切っていたら数頭が、よわよわしくとび去った。

I. 1 鹿児島市上荒田町

ムラサキシジミ 2頭、家の中を回って行ったり、床で日光よくをしたりしてとび回っていた。

I. 2 鹿児島市上荒田町

ムラサキシジミ 2頭が、昨日と同じような行動をとった。

I. 4 鹿児島市上荒田町

ムラサキシジミ 1頭が、活発にとび回り日光よくをしていた。静止する時、翅を70°ほど開いた。

I. 6 鹿児島市上荒田町

ムラサキシジミ 3頭が、活発にとび回っていた。その中の1頭は、大破個体だった。

I. 7 指宿市西オウケ浜

ムラサキツバメ 数頭目撃 若松昭三郎

アカタテハ 1頭目撃 若松昭三郎

I. 8 鹿児島市上荒田町

ムラサキツバメ 15目撃

寒っぱきの花(白)の花粉や花びらを口吻でなめ回していた。(SATSUMA, 第45号, 記録標本箱, P. 50, 11)

ムラサキシジミ 2頭目撃 イスノキの根根上をとんでいた。

I. 9 鹿児島市武町武岡の頂上

ムラサキツバメ 数頭目撃

ゴマダラナユウ 越冬幼虫3令を10頭ほど採取した。

- I. 19 鹿児島市鴨池町中村公園
 コムラサキ 越冬幼虫5頭を採取した。(徳永君へ)
- I. 22 鹿児島市武町武岡
 ゴマダラチョウ 越冬幼虫3令を1頭採取した。(徳永君へ)
- II. 1 鹿児島市上荒田町
 ムラサキシジミ 1頭目撃 若松ミエ
- II. 2 鹿児島市上荒田町
 ムラサキシジミ 15頭目撃：ひなたぼっこをしていた。
- II. 9 鹿児島市上荒田町
 アカタテハ 1頭目撃 若松ミエ
 ムラサキシジミ 1頭目撃 若松昭三郎
- II. 14 鹿児島市田上町唐湊
 モンシロチョウ 25合採1頭目撃 若松昭三郎・採
 (本記録中の1966年の初見記録)
 ムラサキツバメ 数頭目撃 若松昭三郎
 キタテハ 数頭目撃 若松昭三郎
-
- 鹿児島市天保山町
 モンシロチョウ 1頭目撃
- II. 15 鹿児島市照国町城山登山口
 モンシロチョウ 1頭目撃
 アカタテハ 2頭目撃(1頭は有馬高治病院のスキに翅を開いて止っていた。)
 幼虫等 登山口付近のイラクサにおびただしい程の幼虫(2~3令)が巣を作り、ひそんでいた。
-
- 鹿児島市鴨池町唐湊
 モンシロチョウ 1頭目撃 勝田政香
- II. 17 鹿児島市上荒田町
 モンシロチョウ 1頭目撃 若松昭三郎：屋根の高さのところに飛んで行った。
 アカタテハ 1頭目撃：開花中の梅の花(白とピンク)

の蜜を口吻を出しなめていた。(越冬個体の吸蜜植物)

鹿児島市上荒田町中洲陸橋

モンシロチョウ 1頭目撃 路上のこぼれ水を吸っていた。

鹿児島市鵜池町唐湊

モンシロチョウ 廿：キャベツ、ナッパの植えてある畑の上を飛んでいた。

II. 23 鹿児島市薬師町本学園内

アカタテハ 1頭目撃 若松茂正 & 勝田政秀

II. 26 鹿児島市薬師町本学園内

キタテハ 1頭目撃 若松茂 & 勝田政秀：地上0.5メートルの所をと伏回っていた。

鹿児島市鵜池町唐湊

ムラサキツバメ マテバシイをたたいたら、数頭飛ん去った。

ムラサキシジミ がけ状(朝日があたる)の陰で、数頭が頭を寄せ合うようにまるくかたまっているのを見出した。この数が集団が6つ見られた。

モンシロチョウ 廿

III. 1 鹿児島市上荒田町

モンシロチョウ 1頭目撃

ムラサキシジミ 1頭目撃：庭を2回飛び回って消えた。

III. 3 姪良郡加治木町新宮

アゲハチョウ 1頭目撃

III. 5 鹿児島市上荒田町

モンシロチョウ 1頭目撃：若菜に飛び去った。

キチョウ 1頭目撃：若菜に飛び去った。

III. 8 鹿児島市薬師町本学園

アゲハチョウ 1頭目撃：フェニックス他熱帯植物の植えてある所の上空を、回るように飛んで行った。

III. 12 鹿児島市郡元町

ルリシジミ 廿

モンシロキョウ 井

アゲハキョウ 井

アカタテハ 1頭 : 活簀にとびまる。

キキョウ 1頭目撃

谷山市慈眼寺

モンシロキョウ 井 : レンゲの花を吸蜜していた。

Ⅲ. 17

鹿児島市武岡

ルリシジミ 2♂♂採 : ほかに数頭目撃

クロヒカゲ 1♀採

モンシロキョウ 井 : クヌギの花を口吻を出しなめていた。

キキョウ 2頭目撃

ツマグロキキョウ 2頭目撃

アゲハキョウ 数頭目撃

ムラサキツバメ 1頭目撃

Ⅲ. 16

鹿児島市上荒田町鹿児島大学

ツマキキョウ 1♂ 山下勝・採

Ⅲ. 21

日置郡伊集院町

ツマキキョウ 14♂♂4♀♀ 若松茂正 & 徳永誠・採

スジグロシロキョウ 1♂

アゲハキョウ 1♂ (非常な小型) 徳永誠・採

ナガサキアゲハ 1頭目撃

クロアゲハ 1頭目撃

イシガケキョウ 1頭目撃

ムラサキツバメ +

ムラサキシジミ +

鹿児島市磯東郷墓地入口付近

イシガケキョウ 1♀

Ⅲ. 24

鹿児島市武岡

ツマキキョウ 1♀

サツマシジミ 1♂

ウラギンシジミ 1♀
ムラサキシジミ 十：卵数コを得る。
キタテハ 井
アカタテハ 井
ヒメマカダテハ 井

IV. 4 鹿児島市武岡
ナガサキアゲハ 1♂ 目撃：グミの花粉を吸っていた。

IV. 5 鹿児島市上荒田町
モンキアゲハ 1頭目撃：ツツジの蜜を吸っていた。

鹿児島市吉野町電ヶ水

マクシマルリシジミ 1♀
アオバセセリ 1♂：ナノ花，桜で吸蜜していた。

IV. 1 鹿児島市上荒田町
ウラナミシジミ 1♀ 目撃

1966年12月→1967年春

XII. 3 1 鹿児島市田上町唐湊
モンシロチョウ 1♂

ルリ，ウラナミ，ヤマトのうちいずれかを1頭目撃

ムラサキツバメ 十：マテバシイ付近

ムラサキシジミ 十：マテバシイ付近

II. 2 鹿児島市田上町唐湊
モンシロチョウ 1頭目撃

モンキチョウ 1♀（翅の力が不完全）

鹿児島市上荒田町

マカダテハ 1頭目撃：ウメの花（白とピンク）で吸蜜
していた。

II. 3 鹿児島市武岡
ルリシジミ 1♂♀

III. 1 2 鹿児島市鴨池町唐湊 採集者・勝田政秀

ルリシジミ 4♂♀

ツマグロキチョウ 2頭

- キ千ヨウ 2♀
 モンシロ千ヨウ 1♀
 スジグロ千ヨウ 1頭
 III. 18 鹿児島市上荒田町
 ルリシジミ 1♀
 III. 19 始良郡栗野岳温泉
 ルリシジミ 1♂
 キリシマミドリシジミ 卵16コ採取
 III. 22 鹿児島市鴨池町唐湊 採集者・勝田政秀
 ルリシジミ 1♂2♀
 ツバメシジミ 1♂
 キタテハ 2頭
 III. 24 鹿児島市上荒田町
 ルリシジミ 1♂
 III. 25 霧島神宮→湯之野→林田
 P. 3の「春の霧島神宮→湯之野路」を参照
 IV. 3 鹿児島市鴨池町唐湊 採集者・勝田政秀
 アキハ千ヨウ 1♂
 クロアキハ 1♀
 ルリシジミ 2♀♀
 ベニシジミ 1頭
 コジャノメ 1頭
 キ千ヨウ 1♂
 IV. 16 鹿児島市城山 採集区目撃者・中山圭一
 ツバメシジミ 1♀
 ムラサキシジミ 2♂
 サツマシジミ 1♀
 ルリシジミ 3♂♂1♀
 モンシロ千ヨウ 1
 キ千ヨウ 1
 IV. 18 鹿児島市城山 採集区目撃者・中山圭一

アザハチヨウ 廿
 アオスジアザハ 十
 モンキアザハ 廿
 キタテハ 廿
 ベニシジミ 1♀
 ルリシジミ 3♂♂2♀♀
 サツマシジミ 3♂♂2♀♀

IV. 21 鹿 児島市城山 採集者・勝田政秀

アザハチヨウ 1♀
 アオスジアザハ 1頭
 アカタテハ 1頭
 サツマシジミ 5♂♂

IV. 22 鹿 児島市城山

モンキアザハ 1♂ 中山圭一・採
 アザハチヨウ 廿
 コミスジ 1頭 中山圭一・採
 アオスジアザハ 1♂ 中山圭一・採
 サツマシジミ 3♂♂ 中山, 2♂♂2♀♀ 若松・採
 ルリシジミ 廿

IV. 29 鹿 児島市城山

フロアザハ 1♂ 勝田政秀・採
 モンキアザハ 1♂♀ 勝田政秀・採
 ルリシジミ 1♂ 若松茂正・採
 サツマシジミ 1♂ 若松茂正・採
 アオバセセリ 1♂ 若松茂正・採

○参考記録 1965年11月

XI. 27 鹿 児島市吉野町竜ヶ水

ヤクシマルリシジミ 卵・幼虫とも并
 ヤマトシジミ 并
 ムラサキシジミ 1♂採
 ムラサキツバメ 并：竜ヶ水駅の芭蕉を駅員が切り巻し

たため、越冬中の20~30頭
が乱飛した。

30分後見た時は、7頭の集団
を作っていた。(図.1)

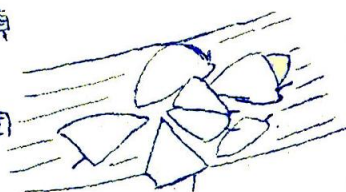


図.1 (写真より)

XI. 28 鹿児島市田上町唐湊

ベニシジミ 1頭 若松昭伸・採
ウラナミシジミ 1頭 若松昭伸・採
ヤマトシジミ 1頭 若松昭伸・採
ツマグロヒョウモン 1 目撃
ムラサキツバメ 越冬集団が非常に多
く20余りの集団をみた。5頭ぐら
いずつの集団が多く、7~8頭のも
のが3つ、35~40頭の集団が1
つみられた。(図.2)
ムラサキシジミ ムラサキツバメの5
頭の集団の中に1頭混っているの
をみた。



図.2

1966年11月

XI. 1 鹿児島市鴨池町唐湊 採集者・勝田政秀

ヤマトシジミ 1♂♀
ゴイシシジミ 1頭
ムラサキシジミ 1♂
アカタテハ 1頭

XI. 2 鹿児島市鴨池町唐湊 採集者・勝田政秀

イシガケキョウ 1♀
コムスジ 1頭
ヒメジャノヒ 1頭
ウラギンシジミ 1♂
キキョウ 2♂♂ 1♀
イチモンジセセリ 1頭

XI. 11 鹿児島市鴨池西唐湊 採集者・勝田政秀

ヒメアカタテハ 1頭
ツマグロヒョウモン 1♂
モンシロキョウ 1♀
ツマグロキョウ 6頭
キキョウ 3♂♂

XI. 20 鹿児島市吉野町竜ヶ水

ムラサキツバメ +: バナナの葉に、アンテナ60° (胴体と反対方向) 翅は閉じたままの個体を見た。

XI. 24 鹿児島市城山

ムラサキツバメ バクチ)キ 20~30頭
アオキ 30~40頭
バナナの葉 7~8頭 の越冬集団を

確認した。

ウラギンシジミ 1♂目 ~~蝶~~子

IV. おわりに

私には、春の記録の最終記録はいつにあるかなど、まったくわからなかった。今始まったばかりである。“記録の積み重ね”をやるうち何か出て来るであろう。それまで“書き”つづけねばならない。

カバマダラを1月に大島で採集

若杉茂正

カバマダラ 1♀

- ・採集地 鹿児島県大島郡住用村
- ・採集日 1967年1月4日
- ・採集者 稲村直久 ・標本所蔵者 若杉茂正(田中洋)

本会の稲村君が、大島へ行かれた時、たまたまキョウを採って来てくれた。その中カバマダラだったわけであるが、冬期の成虫の記録は大変珍しいと思い報告する。

本個体は、飛来中を帽子で採られたそうである。

貴重な標本を快やく譲って下さり、記録の発表を許された稲村直久君には感謝します。

シルビアシジミを鹿児島市紫原で採集

若松茂正

シルビアシジミ 1♀ (小破)

- ・採集地 鹿児島市那元町紫原台地
- ・採集日 1966年10月10日
- ・採集者 勝田政秀
- ・標本所蔵者 若松茂正

鹿児島市内において、本種が採集された例は市内鴨池町の飛行場を除いて大変少ない。今回の採集個体は、草むらに静止していたところを気付き採集されたそうである。採集地をまだ調査していないのではっきりしたことはいえないが、紫原頂上であり地理的条件を考えると飛行場から飛来して来たものかどうか、不明瞭な点が多い。今後の採集地調査(食草ミヤコグサやクロローパー等の確認など)が待たれる。

貴重な標本を快やすく譲って下さり、記録の発表を許された勝田政秀君には、深く感謝致します。

参考文献

橋元紘爾(1965)シルビアシジミを鹿児島・農学部で採集
~~SATSUMA~~ XIV (2):82
SATSUMA

◇ 随筆 ◇

久保正一

近年 科学は原子宇宙時代に入り、あらゆる方面に急速な進歩をとりつつあるが、生物の研究分野もすべてをアインシュタインにより生化学的に究明しようとする傾向にある。したがって半世紀前の分類偏重の特代を今頃持ち出す必要もないが、常日頃よく当面する事はいろいろな植物の名前を聞かれる事である。植物の名は誠に数多く又しばらく遠ざかっていると兎角忘れてしまっていて思い出せないことがある。又生物学を本業としない方々には朝夕親しまれている身近かな植物でさえ正しい名を知らない人もあり、近似のものとの区別となると全くわからないというのが正直な答である。五月から七月にかけて切花となり飾られるアヤメ科の花もその一つである。どれもアヤメであり又ハナシ

ショウブであると考えられている。時にはハナショウブをショウブと混用している方もある。斯様に申す小生もいと年若かかりし頃区別がわからず国鑑と実物との首実験にいたく心を悩ました思い出もある。

今この機会にその二三についてそれぞれの特徴を記して諸君の参考に供したい。

アヤメ科は単子葉植物に属する事は皆御承知のことであるが、葉はすべて平行脈の剣状、花は花茎の先に2, 3枚の苞につつまれ小通常2, 3花を開く。花の各部は3の教から成り、萼に当る外花蓋(外花被)は特に大きく花弁状で下垂、花弁がむしろ小さくて主に垂直に立っている。又中央に三裂して花弁状の小さなものがあるが、これは雌しべの柱頭でハナショウブの園芸品種にはこれも大きくなって八重咲く見えるものもある。面白い事で一般に知られない点は雄蕊の薬であり雌蕊の三柱頭の下にかくれていて、昆虫がのぞいてくれるのをひっそり待つかの様にある。一個の花がすぎて枯れる頃にはもう一枚の苞の間がアドウがのび出して開花する。

次にアヤメ科のいくつかの種類を挙げてその特徴を記し、明確な区別の資に供する。

ハナショウブ——日本産、北の地方には野生種の群落少く、ハナショウブと呼ばれ天然記念物に指定された所もある。三重県の嵯次湿地原はその一つである。園芸種が多い。

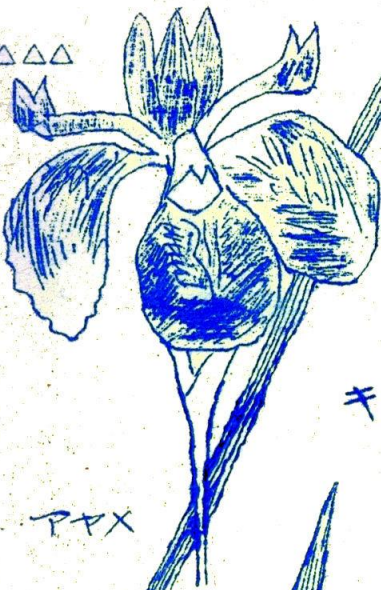
花は外花蓋は大きく下垂し、内花蓋も大きくなり平らに広ろがって外花蓋と区別出来ないもので多い。時に外花蓋とちがって小さく直立するものもあり、品種によっては柱頭まで発達して八重咲に見えるものもある。花色は濃紫色、淡紫色、赤紫色、淡赤色、白色、紋りなど。

葉は幅広く、長く、剣状で中肋(中脈)があり隆起していて特徴の一つである。先端は僅かに垂れている。

熊本(肥後)ハナショウブも、ちりめん縮みの(尹勢)ハナショウブも皆ハナショウブの園芸品種である。

カキツバタ——日本産、湿地に自生する。花は外花蓋大きく下垂するが、その基部中央は黄色、内花蓋は細長く小形で直立している。花茎の中程に一葉あり。花色は紫色が最も普通で、時に紫斑色又は白

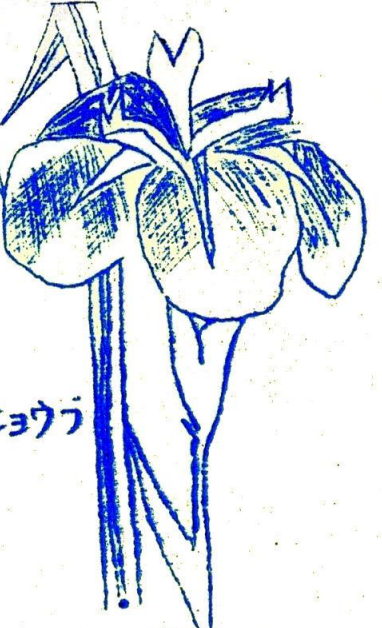
△△△



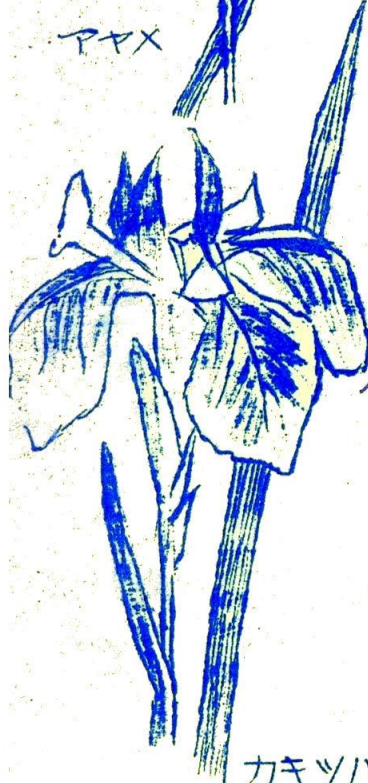
アヤメ



キシヨウグ



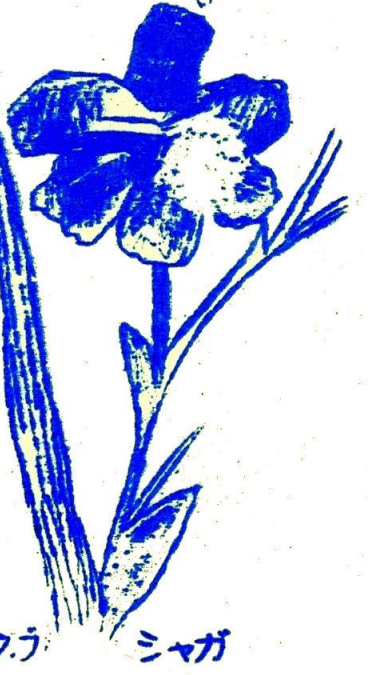
ハナショウウ



イチハツ



カキツバタ



カヤマシヨウウ

シヤガ

けを多て、
 と枝が、
 こ高と小
 う、こな
 いは、い
 と私、親
 だ、つら
 切、鬼知
 尤、こに
 だ、り生
 と鳥、ま
 こ、容、あ
 く、は、い
 書、の、は
 を、る、ね
)、す、か
 文、行、お
 論、見、を
 く、も、先
 文、ら、重
 報、れ、に
 ・、こ、事
 記、の、こ
 集、な、の
 採、だ、ら
 採、の、れ
 一、る、こ
 命、か、て
 恋、わ、か
 一、け、く
 生、つ、よ
 一、よ、に
 生、い、生

会長になって

稲村直大

鹿島高等学校に入会した。僕も他のクラブにとらわれず、すぐ生物同好会に入会した。僕は初め「何となく」という感じで、自分自身もさぼった。一学期はスランアのような状態にあり、4人入会しました。やっとならび、大木・岩元君が入会して来ましたが、そのうち3人が退会しました。我々の急情のせいで、あんなに動かし難い軌道に乗ったというふうでした。

五月初旬若松先輩の後をゆとり後の時、あつた。何も言えない逃げて、も逃げた。つきまとう、囚人のあつた。足の鎖のような責任を感じました。

しりしまた反対に、我々は鳥帽子や水筒に採集に行き、自然の新緑に浸って我々の視野を拡大し、自然に心を寄せた。これは、大いに役立ったと思っています。

こうして現存これらの生物同好会は、若松・原田・菊池さんらの先輩の協力や志告などにより、会員1人1人の努力により、鹿島高校生物同好会が発展しつつあるのです。

我々1人1人の努力と協力により、団結して、1個の灯となり、灯台となつて、わが生物同好会丸の航路を明々と照らして、目的地へのあつた素晴しい先冠に向って突進して行くことでしょう。

近ごろ考えること

過去2年間の生物同好会活動をふりかえって
 元生物同好会会長 若松茂正

この2年間は、私にとって己との戦いだった。まずいかにして生物同好会を続けて行くか、たとえ1人でも——。つぎにいかにして会員を集めるか——。3つ目にはいかにして活動と活発にして行くか——。

早いもので同好会認可があつてから、もう2年も経過したかと思つた。ことに夢の感がする。中学時代生物部に籍をおいていた私は、本校に生物部がないのを大変淋しく思い、4月というのに冷たい風が吹きすさんでいた。

年配の先生が3人、まだ大変若い先生が1人おられた。一見して私はこの室に、鹿島の鬼の存在の先生がおられたのを大変びっくりした。標本を覚えて下さいと尋ねると、「このめんゴツみれよ」と、もう1人の年配の先生が言われた。それらと立派であるべき以前は、県下に生物の名産を裏かかしていた。それらの標本を一見した私は、大変落胆した。と同時に若松少年は、俺の手でさつと心臓に硬く誓つたのでした。

しぼらくして、生物部担当を今年からされるという大変若い先生に部の新設をお話ししましたところ、先生は机の上にある半紙を無造作に取り出され、「男1人若松」と記されました。

これが私と生物同好会のそもそものなりそめでした。

以来ほそぼそながら、たしかに生物同好会活動は続いて来たのです。このころの同好会に対する熱の入れば、今考えると驚くべきものでした。

② つぎにただ先生の云われることだけに満足し、服従するなと。道理にあっていなければならぬ。先生と教諭してほしい。どちらが正しいか、心より納得するまで——。それが若者の特権であり、それなくしてはお互いの向上はないと思えるので。

歴史(伝統)は自分ら(生物同好会員)で作るのであり、作られるのである。鹿児島県の鹿高生物同好会、いや、日本の鹿児島高等学校生物同好会と発展することを切に望んでやまない。

私ごとになり、またつたない文で誌上を汚したことを、おわびします。

来たれ、生物同好会へ

皆さんの中には、生物同好会という名は知っているものの、いったい何をしているのかさっぱりわからないと、いう人はないでしょうか。はなはだしき人になると、生物同好会なるものがあつたとは、まったく知らなかったと、いう人もあつたのですから、そういう人もなきにしもあらずではと思ひます。私の友人の中にも、生物同好会と云えば、カエルの解剖ばかりやっていると云っている人があるのですから、おどろかされます。

では、生物同好会では、会員はいったい何をやっているのかということをお話してみよう。

まず、我々は採集会へ出かけ、おのへの実験材料の確保、また昆虫に興味あるものは、昆玉を。植物に……というものは、植物の採集を行ないます。そして、その時の収穫物は、翌日学校で名を調べたり、整理したりするのであります。普通の日には、自分達の目的に応じて、採集を行なったり、実験などやっています。この他文化祭へ出品したり、会誌の発行やおもな我々会員の仕事です。

生物に関する色々なことをやってみたいな—と思つている人、生物に関心のある人、生物の実験を一度でも……と思つている人は、一度でもいい、生物同好会の戸びらを開いてほしいと思ひます。

あなたのまわりには、生物に関するわからないこと、興味あることで、いっぱいではないのでしょうか。

滅びゆくホタル

教諭 宮原国男

螢来よ、来よとて水を打ちにけり。金花
昔から夏の風物詩として秋々に親しまれてきたホタルは、化学
エネルギーを直接に光エネルギーに変える際
($LH_2 + O_2 \xrightarrow{\text{ルシフェラーゼ}} L + H_2O + \text{光エネルギー}$) 熱を伴わない

い光体をもつ虫として学問的にも貴重であるが、近年になって
滅の一路をたどり、めったに姿をあらわさなくなってしまう。
日本本土で代表的なゲンジボタル、ハイケボタルが姿をあらわ
すのは、ゲンジで5月から6月、ハイケで7月から8月にかけて
2週間の寿命の間に土中に卵を産み、1ヶ月で幼虫になると水中
に入っ翌年の4月頃までワニナなどの淡水巻貝類を食べて4
月も経りになると水中がら這い上って川岸の上でさなぎになり
まゆをつくる。これを破って成虫になる。
つまりホタルがまきる穴には自然の水(ゲンジは清流、ハイケ
はたまり水、水田)とエサになるカワニナなどの淡水巻貝類や小
動物、それと近くに土手と草むらが必要なのだが、こうした環境
は自然のなかからなくなりつつある。
ゲンジボタルは光が大きく強いところから天然記念物となっ
ているが、最近ではそのほとんどが絶滅に近い状態であるとさく。
その原因は鬼薬、工場からの汚水、家庭からの洗剤などが川に流
れる。そのために幼虫もエサになる淡水巻貝なども死んでしまっ
る。そのために卵を産みつける土手や草むらも用水路や護岸のた
めコンクリート化されて産卵場所を失ったためである。
我々の生活は科学の進歩につれて改善され向上したが、美しい
景物はそれに反比例して失われつつある。こうした現状のなかで
手がけられたいが、これは所詮、自然のものも保護しない以上
実験の域を脱しない試みにすぎない。そこで保護区復活が最も
要であらう。それにより国立公園なりに卵を持っていて人工的に
所をつくることもよい方法であらう。

1966・1967の生物同好会活動状況

1966年

- 4月11～21日 同好会員募集ポスター掲示
- 4月～7月 微生物(甲殻類)の檢鏡
- 7月下旬 会員の1人(若松)が、本州採集旅行をした。
- 10月24～29日 文化祭の準備
30日 カエルを用いたの心臓膨動実験のための用意。
31日 標本を会場に投入
- 11月1～2日 **文化祭** 標本(昆虫と貝)を中心
にカエルの心臓膨動実験成果を
展示した。(詳細はP.14を参照のこと)
- 5～12日 同好会員募集ポスター掲示
- 12日 第1回例会(新入男2, 女4)
- 12月以後 目立った活動なし

1967年

- 4月10日 会員募集
- 30日 例会(週2回)、採集会、会費等
を決議。
- 5月2日 採集会計員と打ちあわせ
3日 オ1回採集会(鳥嶋3名, 1名)
- 4日 南極の微生物を先輩よりいただく。
- 23日 第1回総会(会長交替)
25日 校内樹木の命名だつけ計画が立つ。
- 6月4日 オ2回採集会(寺山, 11名)
7月10日 校南誌カ3号のガリ切り始まる。
(M・K記)

1967年後半期の活動計画

8月 文化祭出品のための採集及び研究

採集会(第3回)を霧島で開く

——10月 全国学生科学賞に出品のための研究

9月 文化祭出品物準備

文化祭(20~21日)

県昆虫・貝・植物展に出品

採集会(第4回)

10月 採集会(第5回)

機関誌第4号の原稿募集(上旬)

〃 を発行(下旬)

11月 全国学生科学賞に出品

採集会(第6回)

12月 機関誌第5号の原稿募集

〃 の発行

(M・K記)

鹿児島高等学校生物同好会会員名簿

若松茂正(3B) 鹿児島県鹿児島市上荒田町1.739

原田純一(3B)

〃 原良町1.781 若松弥方
(鹿県ソオ郡有明町原田2.087)

菊池光代(3C)

〃 郡元町1.234

稲村直久(2A)

〃 上荒田町853の7

岩元重喜(2C)

〃 郡西桜島村小池19

- 大木將幹(2F) 鹿児島県鹿児島市武町881
- 的場京子(2A) " 西田町120
- 村山智麿子(2C) " 郡西桜島村白浜
- 中山圭一(1B) " 伊敷町38の7
(鹿児島名瀬市佐大能町4の8)
- 竹田 明(1B) " 西田町145
(鹿児島始良郡霧島町田口35)
- 松尾 真(1K) " ~~下荒田町232~~
~~池之上町36~~
- 山口きよみ(1B) " 武町117
- 加納慶子(1D) " 郡元町2.050-46号
- 今村有紀子(1F) " 伊敷町38の7
会員数(1学期現在)14名
(M・K記)

編集後記

• 早いもので、今年も蝉のコーラスが聞かれる季節になりました。うっとうしい梅雨空がつづき、その雲がひらきさえすればもう初夏がくるはずなのに、それがなが〜ひらがな。そのうちやっと雲の一部がきれ、そこからさわやかな水色の空が覗いている。見る間に輝かしい光がながれこぼれてくる。もう夏なのだ。そんなとき、ふと気づくとどこからかジーという低い沁み入るような蝉の音が伝わってくる。ニイニイゼミである。

芭蕉の「閑がさや岩にしみ入る蝉の声」の蝉はもちろんこのニイニイゼミをさしたものであろう。

• 私宅と二軒先の家は、こんもりと樹木が生い茂っており、二軒先の家ごときはユーカリが十数メートルの高さに及んでいる。この茂みにニイニイゼミが、軒先を借り住みついている。そして

朝な夕なわたしの心をなぐさめてくれ、近ごろ足を運んでない大自然のふところにわたしを運んで行ってくれそうな、そんな気をおこさせる。自然破壊が問題になっている現在、ごく身近かにあるこれらの茂みに愛着を感じ元愛嬌しく思うのである。こんなことを言ったら後輩の1人が「老人が言いそうなことを……」と、言ってお苦笑してたっけ。

3年生の思い出の第3号が、ここによくやく発行されました。6月の考査が終ってから編集を初めた我々は、生徒自身の手ですべてを行ない、先生のお力を借りないということを決意した。生徒の力で計画を立て、研究し、報文を書き、校正し、印刷し、編集することを……。そして今、新聞たる決意が守られる号を発行できたことは誠に喜ばしい。この喜ばしい誇りに誇りを感じている我々である。それはどこから来るところの？先生のお力を借りずに自分らの力ですべてをやりとげたという喜びであり誇りである。

しかし、その向色々な問題に直面した。印刷ひとつをとっても始めは1枚に4ページ刷るはずだったのが、刷ってみてダメということがわかり、やはり袋とじにしなければならなくなった。次には、原稿しめ切り、編集のしめ切り等の期限があまり守れずに発行がはなはだ遅れたということである。このような点は、今後十分気を付けねばならぬ問題である。

なお本誌のさし絵まんがに、素晴らしい作品をお寄せ下さり御協力いただきました仁礼・丸木さんには、心より御礼申し上げます。

我々は我々の持つところのすべてのものを出し切った。3年生の仕事としては、時間的余裕を考えた時少々荷が重かったがもし小ない。しかし今は、「人事を尽くして天命を待つ」という心境である。今こそ皆様の御意見、御感想を聞ける良い機会である。多くの建設的意見を期待しています。どうか、とほとほお寄せ下さいますようお願い致します。

(編集子)

BIOLOGY DATA 1967年7月 昭和42年No.1 第三号

鹿児島高等学校生物同好会機関誌

発行日 1967年7月20日

編集・校正者 若松茂正・菊池光代・原田純一

発行本部 鹿児島市薬師町383

鹿児島高等学校生物室内鹿高校生物同好会